

8月に世界選手権を終えた後、9月にはJOA専務理事としての多くの仕事があった。中でも、9月末の北海道訪問は、夏ばて気味だった自分にはヘビーな仕事だった。「北海道ではねを伸ばすんだ」と言い聞かせて出かけたものの、実際には2泊3日で、全日本のトレインを見た以外に行政関係7カ所とマスコミ6カ所等を回るタイトな出張となった。

行政とマスコミは、来年の全日本とスキーマ0世界選手権のPRを兼ねたご挨拶だったが、多くの時間はオリエンテーリングのことをほとんど知らない方たちにオリエンテーリングの説明することに費やされた。いわば営業のようなものである。その後も、10月中旬のミニ・オリエンテーリング講習会、その直後に呼ばれたある財団の研究会でも、ほとんど知らない人にオリエンテーリングを紹介するチャンスがあった。大企業にたとえるなら、さしずめ、基礎研究所で8月まで働いていたエンジニアが突然営業の最前線に回ったようなものだ。慣れない仕事で、いずれも終わったらぐったりだったが、反面学んだことも多かった。

最大の収穫は、オリエンテーリングの現状が、多くの人にほとんど知られていないことを再認識したことだった。北海道のマスコミ訪問では、ある程度は予想されていたので、競技風景を写したビデオなどを見せながら解説を加えた。誰もが「こんな競技だとは知らなかった」「こんなにハードなんですね」という。中には子ども時代にオリエンテーリングを経験した人もいるが、いずれもパーマントコースを回るといった旧来のオリエンテーリングだけを経験した人だ。

10月に朝霧の野外活動センターで開いたミニ・オリエンテーリングの講習会では、参加者が少ないのである団体に頼んで強引に参加してもらった参加者の一人が「予想以上に面白かった」というコメントを残した。正確な地図、その地図を使うとびたりとチェックポイントに到達できる課題達成の面白さ、思わず走りたくなる宝探し感覚。オリエンテーリングのことは知っていたが、最近のパーク0のようなオリエンテーリングは知らなかったようだ。さらに、その時の地図を某県のキャンプ協会の幹部に見せたところ、「正直カルチャーショックを受けた」と言った。彼は、朝霧野外活動センターでしばしばキャンプをしていて、その場所を熟知しているが、地図の詳細さに驚



ミニ・オリエンテーリング経験後、地図を見ながら感想を話し合う受講者たち

き、「こんな地図があるといいなと思っていたんですよ」と言った。確かに、パーク0の地図に限らず、O-mapのような詳細な地図があれば、長期キャンプでの活動の企画はずっと楽になるだろう。

ちなみに講習に参加してくれた朝霧野外活動センターの所員の方も、これまでは自分で指導経験もないし、魅力も分からないので、利用者向けへの講習でも、オリエンテーリングを紹介することに躊躇していたという。残念ながら、朝霧野外活動センターは、来年度から指定管理者制度で所員ががらっと変わってしまう。指定管理者が決まったら、まずその所員の人たちへの「営業」をしよう。

某財団の研究会でも、「子どものころやったことはあったんですが、地図に書いてあったところにチェックポイントがなくて、頭に来て、それ以来嫌いになってしまいました。こんな面白そうな競技だったんですね」というコメントをもらった。

こういう経験をしてみると、これまで私たちが普及以前にオリエンテーリングの現状やその中にある魅力を、社会に対して伝えることを怠ってきたことが分かる。1970年代にオリエンテーリングがすさまじい勢いで普及した時、その中核にいた人たちはそれをやってきたのだろう。1990年代までは、その遺産で、なんとかオリエンテー

リングはそれなりの参加者を保ってきたのだと思う。

そのころとは社会情勢も変わってしまった。当時魅力だったことが今も魅力的な訳ではない。けれども、オリエンテーリングそのものも変わった。変わらない魅力もあるが、変わった魅力もある。「自然が舞台」「生涯通じたチャレンジ」これは1970年代も今も変わらない魅力だろう。ただ、今では自然が舞台のスポーツも、生涯通じてチャレンジできるスポーツもぐっと増えってしまった。

「知的アドベンチャー」これはどうだろう？ 思わぬことが起こる自然の中で、地図を頼りの自分のルートを計画し、進路を決定していく。これも昔からのオリエンテーリングの特徴であったが、かつてより不安定になった自己責任の時代において、昔とは違ったアピールがあるのではないだろうか。

普及をするなら、まずは「自社商品」を使いこなしてみ、その魅力を意識し、それをアピールする努力からスタートすることだろう。「営業回り」の経験は、そんなことを考えさせてくれた。

(村越 真)